

# 信州読書会 ツイキャス読書会

## 課題図書 太宰治『きりぎりす』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を800字で書いていただければ、放送中に紹介します。  
(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=714](http://bookclub.tokyo/?page_id=714)

今後のツイキャス読書会の予定です。 [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=2343](http://bookclub.tokyo/?page_id=2343)

課題図書はこちらでお求めください <http://astore.amazon.co.jp/sphinx01-22>

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(感想文は動画の下の説明欄にPDFへのリンクを張ってあります。)



シャヴァンヌの絵です。

第25回のツイキャス読書会の課題図書は、太宰治の『きりぎりす』です。

[青空文庫版のテキストはこちら](#)

[朗読はこちら](#)

今回は、たくさんご提出頂きました。読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

## 『きりぎりす』感想文

第一印象はこんなにも長い手紙を書くということはかなり溜め込んでいたんだなと思いました。

私もなかなか言えなくて最後に爆発するタイプなので何となく分かる気がします。言わなきゃいけなくなったらもう終わりの気もします。

でも、この女性はただ別れたいだけでこんなにも細かく相手に対して分析をしているというのは、お金によって悪いように変わってしまった男に昔のようなお金の、ためだけでなく自分の思うままに絵を描いて、その作品に愛着を持つようなまっとうな人になって欲しくて書いたように思いました。

お金は大事だけど、お金持ちになって人の事を馬鹿にしたり、芸術が完全にビジネスになってしまっているのは悲しいと思うし、自分の意思もない空っぽな人間だなと思いました。

それは、お金のせいなのかもしれないけど、人に流される性格がそうなったのかなと思いました。

世の中には旦那さんが、家にお金を入れてくれないという話もよく聞きます。画家の男の事を弁護するとすればお金を家に入れる事が男の役割だと思っていたのかもしれないなど。

私は特に決まった宗教を信じているわけではありませんが、きっと神さまみたいな方がいて、日頃の行いをご覧になっていると思います。なので最低な生き方をしているとそのうち自分にかえってくると思うので、手紙の中で何回も悪いことが起きるように願っていると書いているのを読んで男の事を心配しているように思いました。

でも、縁の下でこおろぎが鳴いているのに、なぜ、『きりぎりす』が背骨の中で鳴いているのかが分からなくて、お話の一番大事な所が理解できてなくて消化不良な感じです。

(おわり)

## 「きりぎりす」 感想文

前半の文章を読んだ時、主人公の女性は本当に夫を愛していたのか疑問に思いました。

なぜなら 「あなた以外の人には私には考えられません」と書いているのに、「父も母もひどく反対だったのでございます」とか「他にも二つ縁談がございました。」とかの自慢話や、「私でなければお嫁にいけないような人のところへお嫁に行きたいものだと考えていた」とか書いてあったからです。

結局、最後まで読んで、女性は夫が自分の理想としていた男性でなかったことに今失望していることが分かりましたが、夫は今幸せであり、女性に苦勞をかけたわけでもないのですから、夫に非があるのではなく、夫を選んだ女性の判断が誤りだったということだから、女性は自分の間違いを素直に認めるべきだと思いました。

また、夫の言動に不満があるなら、本当に愛しているなら、指摘するべきで言わずに黙っていたのは、女性も自分にうそをついて生活していたのだから、夫をうそつきと言うのはおかしいと思いました。

だから私は、女性の「どこが間違っているのかわかりません。」の答えはこれだと思います。

嘘をついて生きてきた女性は今悩み、嘘をつかずに生きている夫は何も悪いことがおきなかったといえます。

そして背骨の鳴き声は、自信がちょっとないのですが、「もっと早く間違いに気が付けばよかったね。」という、天の声か自分の声ではないかと思いました。

(おわり)

## きりぎりす 太宰 治 読書感想文

鏡に向き合う。  
じっと見る。  
目に見えるすべてと  
心の奥底までひたすら見る。

そして  
自分への偽り、怒り、戒めを  
妻からの手紙という形でさらけ出す。

太宰治が  
なぜここまで自虐的なのか、  
すべてを自白することで  
神に許しを乞うための行為＝小説。

自傷行為であり虚無感への抵抗。

いずれ自らを絶つ命のカウントダウンは  
この小説の中にも見える。

鏡は写し。  
写っている姿は自分のようで  
すべてが逆写し。  
男が女になり、  
自己分析の独白が  
汚れのない妻の姿に変わり  
勝手な客観性をまとして小説となる。

心の奥は見せず、  
構われたくないのに  
世間に構ってもらいたい  
末っ子気質の甘えん坊。  
太宰ファンには怒られるだろうが  
この画家も妻も足りない自分をわかりながら  
もがいている太宰自身なのだ。

お別れします。

もう少し話す余地は？

くだらない。

君のためだったのに。

恥じてください。

いまようやく気づいたよ。

あなたは卑怯です。お別れします。

ちゃんと向き合いながら  
生きてゆけたら理解し合えたのに  
井戸を掘らなかったのね。

太宰に言わせれば  
人が生まれてきたこと  
の原罪が明らかに裁かれない限り  
きりぎりすは  
いつまでも幽かな声で  
凜と唄うだろう。

(おわり)

## 『きりぎりす』 感想文

『こらー！ たけしー！ へちまの棚を作りなさいよ！』

と、もしジャイアンのお母さんのようにキレていたらどうであったのか。  
奥さんとしての威厳がキリギリス並みなのがこの物語の悲しいところだと思います。  
しかし、威厳があったならきっとすぐ捨てられてしまうのでしょう。

骨董屋の但馬さんを通して知り合ったあなたが、死ぬまで貧乏で、わがまま勝手な画ばかり描いて、世の中の  
人みんなに笑われて、誰にも頭を下げず、俗世間に汚されず過ごす人だと思っていたがもの見事に成功し成金  
になってしまう。

私という人は、貧乏になればなるほど、嬉しくなりお金が本当に何も無くなった時には自分のありったけの力  
をためす事が出来てとても張り合いがあつて過ごせていたが、急にあなたが偉くなり三鷹の家に住んでから楽し  
いことが何もなくなってしまう。

そして、あなたが偉くなったことに恥ずかしさを覚える。

と、言うのもいつの間にか年賀状 300 枚を作らなければならないくらい知り合いが増え、デパートでバカ買い  
したり、面倒だと植木屋を呼べなどと成金と何一つ変わらず、お金を気にしたり、人の口真似や、急にお喋りに  
なったり、いんちきであつたり、嘘や、悪口、卑劣、陰口などが目にあまり、人間の誇りが無い人間に見えてし  
まったからだ。

そして、但馬さんまでもが、ついに『但馬の馬鹿がまた来ましたよ』と、アホになっており、みんなでグルに  
なって私をからかっているように感じてしまう。

心の中ではなく、『私は金など何も欲しくはない。遠い大きいプライドを持ってこっそり生きたい』そう、正  
直に相談してみるのが良かったのかもしれない。

主人公の私さえ、相手の性格を読めていなかったのだから、結婚する前に相手を見極めるのは困難だと思いま  
した。

しかし、この一人語りの私は、他の結婚相手と暮らしても結果的には金持ちになってしまう運命の星に生まれ  
た人ではないかと思いました。

(おわり)

イノマンさんのブログです。 『イノマンブログ』 <http://ameblo.jp/inoman-1984/>

## 『きりぎりす』 読書感想文

突然になりますが、私は電気グルーヴがメジャーデビューする以前から大好きです。彼らは癖が強く、イロモノとして誤解される事が多いのですが、音楽に対してキチガイがつく位まじめで、自分たちの考えを、しっかり持って活動されていると私は認識しております。

もし自主制作をしているころから好きだった電気グルーヴがメジャーデビューを果たした途端、作品が変容し態度もなにやら大きくなって、かっこばかりつけるようになっていたら、間違いなく興味がなくなっていました。

ただ四六時中一緒にいる夫婦とは異なり、ああ、あなた達は早く躓いたら、いいのだ。とまでは、おもいませんが。

そんな電気グルーヴでもやはり俗世間との闘いがあったのだと想像します。彼らはデビューして5~6年後ヒット曲を意図して作った「[シャングリラ](#)」というシングルを実際にヒットさせました。

その曲はイントロがまるまる他人の曲のサンプリングでプロモーションビデオはロマンチックな曲調とはかけ離れていて、悪意があります。これは、もしかしたら彼らなりの俗世間との折り合いのつけ方だったのかな、と「きりぎりす」をよんでいてふっと、思いました。

「きりぎりす」は俗世間に変容せず美しく生きたいという理想を持ちながら、俗世間に染まってしまいそんな自分を戒め、これからどうするか？ と苦悩した太宰治の素直で自嘲的な作品と感じられ、前述したエピソード等を思い起こし、真っ先に電気グルーヴとやり口が重なりました。

どちらも作品自体癖が強く受け取る側の好みがはっきりしていて、表現方法がすっとぼけて、巧みなところと、あとユーモラス（じわじわする感じです）な所です。

「こんにち在るは」のくだりと「但馬のばかが、また来ましたよ」のくだりは特にお気に入りです。

最後の部分の「背中の中の小さいきりぎりす」は「俗世間に染まった方が楽だし賢い生き方だよ」という（悪魔のささやき）の事だと思いました。

この解釈では、きっと、私が正しくなくて、何度も読みましたが、正直、何を喩えているのか、どうしても、わかりません。

（おわり）

## 『 夢に向かい交差点を渡る「途中の人」はいいね 』

私は、きりぎりすの鳴き声を知らなかった。「虫の声」の童謡の二番冒頭の「きりきりきりきり きりぎりす」の歌詞が「こおろぎ」に差し替えられているバージョンしか知らないの、きりぎりすは鳴かない虫だと思っていた。実際に音声で聴いてみると他の虫たちのメジャーな鳴き声と違い、「ジジジジ」と地味だった。こおろぎときりぎりすは以前は区別が曖昧だったらしいが、売れない画家に嫁いだはずだった女の背骨から聞こえたのは「リンリンリン」という涼やかなこおろぎの鳴き声ではなく、やはりきりぎりすだと思うのだ。

女は、「私でなければ、お嫁にいけないような人のところへ行きたいものだ」という自らの信念を叶える。売れない画家の絵を見つめて、自分だけがこの人の孤独を理解してあげられると体が震える。きっと、この画家に何の将来性も見出さなかったのだろう。しかし、この画家は原石だった。原石はいつか見出され、磨かれていくとは女は推し量れなかった。

会社経営の父親をみて、「成功」は汚く醜いものだと女は思っていたのだろう。画家が立身していく様に我慢ができず、別れを告げる。確かに、夫が徐々に俗世間にまみれる様は耐えがたいことだと理解できる。裕福な生まれを憎んでいた作者に被るのかもしれない。でも、人間は理想だけでは生きていけない。現実と折り合いをつけながら皆生きるのだ。「売れない」好きな絵だけを書いていたら、どんなに素晴らしいことか。本当の意味での底辺を知らないからこそその「純粹」さだ。画家の状況に応じて、愛情の深度が変わるのは、決して画家本人を愛していたわけではないのだろう。自らの信念や価値観の方が大切なのだ。

上記のタイトルは、B 'z の「[LOVE PHANTOM](#)」の歌詞だ。成功したからこそみえる風景なのだと私は理解する。でも、まだ「途中」の私は、「途中」が苦しいと思っていた。何事にも恵まれていた女は、この歌詞の状態でも永遠に生きていたいのだ。皮肉にも画家は才能が開花し、女の望むだめんずではなくなった。愛する人より、自らの価値観を優先してしまううちは、だめんず好きは直らない。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

<http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。



## 『高潔な愛情』

「でも、ひとりくらいは、この世に、そんな美しい人がいる筈だ、と私は、あの頃も、いまもなお信じて居ります」

この一文は、とても純粹だから、私は複雑な気分を駆られた。

妻は、この手紙を書きながらも別れを切り出さなかったと思う。書きしたためて机に忍ばせていただけかも知れない。私も恥ずかしながら学生時代に似たような手紙を書いた記憶がある。しかも何通も。今思うとこれだけの思いをぶつけられる対象があったことがうらやましく思える。

一方で当時の自分を振り返ると、冷静さに欠けるいくつもの言動に反省してしまう。相手を困らせていたかも知れないし、あれほどのエネルギーをもっと別のことに振り分けられなかったの？と思う。

妻は、画家として成功するまでの「俗世間に汚されずに過ごしている」夫に自己の願望を投影していた。「あなたを汚したくなかったのです」思わず赤面しそうになる妻のセリフに私は強い母性を感じる。この人は私がいなくて駄目になってしまうと懸命につなぎとめようとする。この小説の時代の女性は、こんなふうに母性に頼って生きていくことができたのかも知れないし、「結婚」は母性を護る合法的手段でもあったのだろう。

それと対象的な人物が騎士団長殺しに出てくる秋川まりえだ。妻と秋川まりえが対談したらどんなだろう？ これからの厳しい世情では女性が『高潔な愛情』を注げるのも 20 歳までにしないと、男性に振り回されるほどの時間的経済的余裕がない。秋川まりえのように見かけは能面のように、母性を半分捨ててしたたかに生きて行かざるを得ないのが現実ではないか。女性にとってはつらい時代が訪れたように感じる。

母性が保てるのは社会にまだ余力のヒダがある証ではないか。気持ちの上だけでも「高潔な愛情」を保っていたいけれど、これからは母性もバーチャルリアリティの世界しか発揮できないのかも知れない。私が応援しないとユズルが 4 回転サルコウを失敗するのよ～という世界とか。

(おわり)

## 『きりぎりす』の感想文

太宰治の「きりぎりす」を初めて読んだ。表題は作中の最後に出てくる「こおろぎ」と「きりぎりす」によるのだろう。調べてみたところ、古くは「こおろぎ」のことを「きりぎりす」と呼んでおり、鎌倉から室町時代にかけて呼び名の変化が起きたとのことだ。これを作中の「私」の亭主である「あなた」（以下夫）が変わってしまったことと重ねているのだろうと思われた。

作品は「私」の書いた手紙のような独白調で状況の説明がなされている。「私」は「死ぬまで貧乏で、わがまま勝手な画ばかり描いて、世の中の人みんなに嘲笑せられて、けれども平気で誰にも頭を下げず、たまには好きなお酒を飲んで一生、俗世間に汚されずに過して行く」ような夫の人柄に惹かれて、両親の反対を押し切って妻になった。「私」は清貧を是とするクリスチャンで、貧乏な生活にマゾヒスティックな快感すら感じていた。しかし、夫の画が次第に名声を得、経済的にも豊かになっていくのにしたがって、夫が周りの評判を気にしたり、社交的に振る舞ったり、その陰では相手の悪口を吐き捨てたりするなど世俗にまみれた人物に変わっていったことに対しての我慢ならなさが苦々しく語られている。

しかし、読み返してみると、もしかしたら夫という人物はもともと自分がないというか、周りの影響を受けてどのようにでも染まる人物で、周囲の状況が変わりそれに適応していっただけで、「変わってしまった」と嘆くのは些か思い込みが激しい「私」がこうあって欲しいという思いを投影したイメージを裏切ったために生じた、「私」側の要因でもあるようにも思える。

そうだとすると、表題の「きりぎりす」というのは同じ虫であるのに、ただ人間が「こおろぎ」とか「きりぎりす」と呼ぶことで別物のように判別されるということを訴えようとしているというのは穿った読み方だろうか？

（おわり）

## 「モオパスサンだって、やはり信仰には、おびえていたんだね」

夫を日陰の生活で支えていたほうが、この小説の語り手の妻は、幸せだった。夫の作品の高潔な品位は、妻の献身があってこそ、成立していたと、彼女は信じ切っていた。彼の初期の代表作は、夫婦の共同作業で生まれたはずだ。

淀橋アパートの二年間こそが、自分たち自身を見失いながら、最も自分たち自身だった幸福な時代だった。夫は、清貧の画家、シャヴァンヌの如き厳格な祈りを求めて、創作にはげみ、妻も尼僧のように、生活を夫に捧げ、創作の傍らで、無垢な一体感を感じていた。

しかし、敏腕プロデューサー但馬が、頃合いを見て夫の作品を本気で売り出したとたん、陶醉した修道僧のような生活からさめて、夫は、どこか「しらふ」になった。

新浪漫派を標榜したということは、世間が、好意を持って反応するツボに迎合したことなのだ。長いスパンで、売れるツボへと、夫を誘導し、金の力で、ずるずると芸術運動に引きずり込んだのは、但馬の悪賢いところだった。

彼の巧みなマネージメントが、夫を、急激に墮落させた。迎合するたびに、夫は、イロニー（自己否定による自己正当化）を深めた。（ロマン派のイロニーというのは、本来、そういう下等な自己欺瞞なのだ）

ロマンを悪用して、世間を騙すためには、まずもって自分たちを欺かなければならないものだから、この二人は戦時中の暗い世間がもつめた浪漫に迎合し開き直った。無垢を信じたい妻は、但馬と夫の共同作業に、ついていけなかった。

夫婦の無垢な夢から覚めて、我に返った。とたんに、別れたくなった。

「無知は富と結びついてはじめて人間の品位をおとす」と、ショウペンハウエルは書いたが、浪漫と金が結びついてはじめて、この夫は、品位を落とした。

本来なら、この妻は、但馬に怒ればいいのだ。

しかし、但馬にだまされたのは、彼女とても同じである。

結局、この夫婦は、但馬の策略によって、まんまと鳴かされていた、愚かなこおろぎなのである。

断じて、きりぎりすではない。

（おわり）

『信州読書会』 メルマガ登録はこちらから [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=714](http://bookclub.tokyo/?page_id=714)

今後のツイキャス読書会の予定です。 [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=2343](http://bookclub.tokyo/?page_id=2343)

課題図書はこちらでお求めください <http://astore.amazon.co.jp/sphinx01-22>